

第 15 冊

『織田信長のマネー革命』

～経済戦争としての戦国時代～

武田知弘、ソフトバンク新書、2011年

第4回

延暦寺の焼き打ち

中世の寺社＝強大な「支配者階級」

信長と言えば「比叡山の焼き討ち」や石山本願寺との10年にもわたる合戦「石山戦争」を思い出しますね。その最大のものは「**比叡山延暦寺の焼き討ち**」でしょう。元龜2（1571）年に行われたこの焼き討ちにより、比叡山の僧侶や住民も含めて老若男女、数千人が殺されたといえます。「こんな残虐・非道なことをするなんて、なんてひどいやつだ」と思われるかもしれません。

私も、昔はそのように思っていました。でも、歴史を知れば知るほど、その思いは無くなっていきました。むしろ逆に、「なんて比叡山延暦寺は残虐・非道なことをするんだろう！！」「そんな悪い奴らをやっつけた信長は凄い」と考えるようになってきました。

ここから、信長のいわゆる「宗教弾圧」「仏教弾圧」と言われるものが、むしろ、「歴史を前に進めていった」行為だということを説明していきましょう。

信長は、比叡山延暦寺の焼き討ち、石山本願寺との対決に見られるように、寺社と敵対してきました。そもそも、**信長がなぜ寺社と敵対したのか**というと、**信長が寺社の利権を奪っていたから**ですね。

たとえば、**比叡山延暦寺の焼き討ちは、延暦寺が朝倉・浅井側に味方したことが直接のきっかけ**です。**なぜ延暦寺が朝倉・浅井側についたのか？** その答えは、**信長が延暦寺の荘園を奪っていたから**です。

延暦寺に限らず、信長は多くの寺社の利権を奪ってきました。信長が他の大名に比べて素早く強大な経済力を持つことができたのは、この点が大きな理由でしょう。他の大名は、寺社勢力の利権にはあまり手を出さなかったのです。

寺社勢力の利権の巨大さは、戦国大名にとっては目の上のたんこぶであり、悩みの種でした。しかし社会的な影響力の大きさを考えて、寺社勢力にはなかなか手出しができなかったのです。ほとんどの戦国大名は、寺社勢力とは敵対しませんでした。せいぜい寺社を懐柔して、利権のおこぼれに預かる程度でした。



比叡山延暦寺根本中堂

武田知弘氏の『織田信長のマネー革命』では次のように記されています。

・・・当時の寺社というのは、経済社会の中で非常に大きな利権を持っていた。あちこちの荘園を持っていたし、港を押さえて大きな関税収入を上げたり、市や座を取り仕切って、多くの収入を上げていたのだ。

戦国時代の経済社会というのは、大きく分けて3つの経済主体があった。「公家」「大名」「寺社」である。そのうち公家は時を経るごとに経済力を失っていたので、もうあまり問題にならない。つまり、戦国時代の経済社会というのは「大名」と「寺社」で支配されているようなものだ。

しかし寺社はアンタッチャブルな存在だった。そのため大名たちは、自分たちの持ち分を食い合うことで、成長したり没落したりしていたのである。そのような中で、信長だけは聖域とされていた寺社に手を出した。抵抗は大きかったが、その分、実入りも大きかったのである。信長が他の武将に抜きこんだ要因のまず1つは、ここにあるのだ。

信長が仏教を目の敵にしたのは、「宗教を否定していたから」ではありません。事実、信長に逆らわない寺社は存在を認められています。信長に敵対したからこそ、つぶされたのです。

では、中世における寺社というのはどのような存在だったのでしょうか？

当時の寺社と現在の寺社とは全く違います。**当時の仏教は、国の政治経済の中枢を握っている「特権**

階級」でした。中世の寺社は、端的に言えば、社会の中心・中核ともいえる存在でした。ですから仏教勢力は、信長の天下統一の大きな障害となっていたのです。

中世の寺社勢力に関しては、このホームページの第9冊『**寺社勢力の中世**』（伊藤正敏著、ちくま新書）で詳しく書いていますので、そちらを参照してください。

まず、**彼らは桁外れの経済力を持っていました。**信じられないかもしれませんが室町時代から戦国時代前半にかけて、日本の富の多くは寺社が所有していた、といっても過言ではありません。

大村大次郎氏の『**お金の流れで読む日本の歴史**』によれば、

永正5年（1508）、管領の細川高国は、日本中の「大金持ち団体」に対して通貨に関する新しい命令「撰銭令」を発した。・・・この撰銭令をまず8つの大金持ちに発布することで、全国の経済に影響を及ぼそうとしたのである。

この8つの大金持ちというのが、当時の国の経済を牛耳っていたと言えるわけで、いわば**戦国時代の「8大財閥」**と言えるだろう。

「戦国時代の8大財閥」として挙げられているのが、以下のものです。

- | | | | |
|------------|-------|----------|-------|
| ①大山崎（自治都市） | ②細川高国 | ③堺（自治都市） | ④山門使節 |
| ⑤青蓮院 | ⑥興福寺 | ⑦比叡山三塔 | ⑧大内義興 |

この**8大財閥**のうち、実に4つ（山門使節、青蓮院、興福寺、比叡山三塔）が寺社関係なのである。しかも、4つの寺社関連のうち、山門使節、青蓮院、比叡山三塔が比叡山関係である。比叡山延暦寺は日本最大の財閥だったといっても過言ではないのである。

戦国時代「日本の8大金持ち」とされたものの中に、寺社が4つも含まれていたのである。

イエズス会宣教師のルイス・フロイスは、根来寺の僧のことを「彼らは富裕であり、絹の着物を着て、剣や短剣には金の飾りをしていた。髪は背の半ばまで伸ばして結んでいた」と書き記している。

絹の服を着るといのは、当時としては相当な金持ちしかできないことだった。戦国時代の絹の生産はあまり行われていなかったため、ほとんどが輸入だったはずだ。また金の装飾品なども、そうそう入手できるものではなかった。このことから根来僧がいかに裕福だったかがわかるものである。

同じくイエズス会の宣教師の報告では、日蓮宗の本國寺について、「彼らの収入の多くは、檀家の寄進で、彼らはこれによって贅沢に衣食している」と述べられている。

上記のように、中世から戦国時代の寺社は、相当な経済力を有していたんです。

延暦寺焼き討ちの経緯

なぜ、信長は比叡山延暦寺を焼き討ちしたのでしょうか？なぜ、数千人もの僧侶たちを殺したのでしょうか？ それを理解するために、まず焼き討ちに至る経緯を見てみましょう。

元亀元（1570）年、朝倉・浅井と戦っていた信長は、実は比叡山に対し「朝倉軍に荷担しないように」と要請していました。

このとき信長は、「もし、どちらかに荷担するのが仏教徒として不都合ならば、中立を守るだけでもいい。そうすれば以前の比叡山の領地を返還する」といい、証文まで出しています。ちょっと下手に出ている感じがします。

にもかかわらず、比叡山は朝倉軍に荷担しました。それで、信長は激怒し、翌年、朝倉軍との戦いが一段落したあと、比叡山を焼き討ちにしたのです。



朝倉氏の城下町一乗谷



一乗谷朝倉氏遺跡

ただ、比叡山としては、これまで信長からかなり厳しい仕打ちをされてきていましたから、朝倉軍に味方するのは当然かもしれません。信長が「荷担するな」といつてきても「何を今更」という感があったのかもしれない。

信長は、比叡山が朝倉に荷担する前から、比叡山の荘園を没収するなどしてきました。関所の廃止も楽市楽座も、比叡山の利権を侵害するものでした。入洛してからずっと比叡山に対して厳しい姿勢で臨んでいました。

だからこそ、比叡山は信長に反発したのです。つまり、信長と比叡山との対決は、最初から避けようがなかったのでしょうか。

なぜ信長は、比叡山に対して初めから挑発的な態度を取ってきたのか？その最大の理由は、延暦寺の経済力にあったのです。

「財閥」延暦寺＝多数の荘園を所有

では、どうやって延暦寺は大財閥になったのでしょうか？

まず第一に挙げられるのは、その領地（荘園）の広さです。

中世から、寺社は農地の寄進を受け、それが荘園となっていました。その荘園の広さが半端ではありませんでした。現在わかっているだけで、**比叡山の荘園の数は285カ所**を数えるといえます（『**近江から日本史を読み直す**』今谷明、講談社現代新書）。

比叡山の古記録は信長の焼き討ちでほとんど失われており、荘園の記録も多くが不明になっています。にもかかわらず、これだけの数の荘園が判明しているのです。実際の数、それをはるかに超えるでしょう。

しかも**比叡山の荘園は、近江や近畿ばかりではなく、北陸、山陰、九州など全国に分布**していました。現存する記録から見ただけでも、**近江の荘園の4割、若狭の3割は比叡山関係のもの**だったと推測されるといいます（『**湖の国の中世史**』高橋昌明、中公文庫）。

さらに、比叡山は農地を持っていただけでなく、**京都の繁華街にも広い領地を持っていました**。京都・五条街に3ヘクタールもの領地を持っていたことがわかっています（『**寺社勢力の中世**』伊藤正敏、ちくま新書）。

これは後醍醐天皇の二条富小路内裏と足利尊氏邸を合わせたものよりも、さらに広いのです。3ヘクタールもの土地を持っているのですから、地子銭（地代）だけで相当な額に上ったはずですよ。

また、広大な領地を持っていたのは、比叡山だけではありません。他の寺社も、日本全国に相当な荘園を持っていました。

例えば、**紀伊（和歌山県）では、水田面積の8～9割が寺社の領地だった**とされています。また、**大和（奈良県）では、興福寺、東大寺、多武峰、金峯山領でない土地はない**と言うほどでした（『**寺社勢力の中世**』伊藤正敏、ちくま新書）。

天皇や公家、幕府など為政者にとって、寺社は相当にやりにくい存在だったはずですね。

「財閥」延暦寺＝金貸し業者!

どうやって延暦寺は大財閥になったのでしょうか?

2つめに挙げられるのは、金貸し業で稼いでいたのです。

また、比叡山は古代から貸金業をしていて、借金の担保で土地を得ることもありました。

大寺社は、全国規模で展開する「金貸し業者」＝金融業者でもありました。なかでも、代表格が比叡山延暦寺だったのです。当時、金貸し業者は「土倉（どそう）」と呼ばれていましたが、その多くは比叡山が関係していたとも言われています。

土倉は今で言う「質屋」と同じ様な形態をとります。質草＝担保をとって金を貸すのです。質草を保管するのが土倉であることが多かったので、彼らのことを「土倉」と呼ぶようになりました。

比叡山の土倉は、「山門気風の土倉」と言われました。「**山門**」とは**比叡山のこと**であり、比叡山は土倉の代名詞となっていました。今で言うならば、「三菱グループ」「三井グループ」のような存在だったんです。

では、なぜ、比叡山が土倉となったのでしょうか?

その起源は平安時代にあります。日本有数の寺社だった延暦寺は、広大な荘園をもち、またあらゆる人々から莫大な寄進を受けていました。延暦寺には、当時、最も大事な物資であった米が大量に集められていました。

この米を、比叡山にある日吉大社が、「出挙（すいこ）」として、高利で貸し出していたのです。

出挙って何でしたっけ?

出挙というのは、古代、**国家が貧しい農民に種籾を貸し出し、秋に利息をつけて返還させた**ことに端を発しています。**当初は、貧民対策だった**ものが、次第に「利息収入」に重きが置かれるようになり、いつのまにか**国家の重要な財源となった**のです。また、私的に出挙を行う者も出てきて、それは「私出挙（しすいこ）」と呼ばれ、貸金業と同様の業態になっていきました。

この**私出挙を、延暦寺の日吉大社が始めた**のです。日吉大社というのは、『古事記』にもその記述がある由緒ある比叡山の神社です。延暦寺が比叡山に建立された際、日吉大社を守護神としたため、中世から戦国にかけて、日吉大社は延暦寺と表裏一体となって隆盛を極めました。

そして、日吉大社は、平安時代から実質的な貸金業である「私出挙」を精力的に行いました。日吉大

社の職員である「神人」が諸国に出向いて、公卿から物売り女にまで、あらゆる階層に広く私出拳を行っていきました。そして、中世になり貨幣経済が発展し「私出拳」は本格的な貸金業である「土倉」へと進化していったのです。



日吉大社山門



日吉大社西本宮

比叡山に限りません。全国の寺社で同じようなことが起きます。では、**なぜ、寺社が貸金業を営むことが多かったのでしょうか？**

私出拳だけでなく、寺社には多くの荘園が集まり、多くの寄進もありましたから、多くの富が蓄積されていきました。それを保管しているだけでは増えませんよね。**蓄積された富をうまく運用していけば儲かります。儲けを多くするため、貸金業が行われたのです。**

このように延暦寺は「土倉」を精力的に行いました。いや、土倉を広めたのは延暦寺だったと言えます。延暦寺日吉グループは、「土倉業界」でも首領的な存在となり、**京都の土倉の8割は、彼らの関連だったとされるほどにまで発展**しました。また京都だけではなく、全国の土倉にも影響を及ぼします。だからこそ「山門気風の土倉」と呼ばれていたのですね。

しかも、この土倉は利息が非常に高かったのです。当時ではごく標準的な利息が「月利4～6%」だそうです。ということは、**年利**で言えば、何%になりますか？

年利では「48～72%」にもなります。ということは、現代の消費者金融をはるかにしのぐ「超高利貸し」をしていたわけです。

しかも、借り手が債務不履行（借金を返済できない状態）になったときの「所業」が、またひどかったんですね。どうということかということ、暴力団まがいの非情な取り立てを行ったのです。

1つは、彼らは、自分たちが寺社であることを盾にして「金を返さなければ**仏罰や神罰が当たる**」と**いって脅した**のです。金を借りた者が返さぬ場合、「罰が当たる」と言えば、債務者は恐れおののきます。武士でさえ、神社仏閣には、歯が立ちませんでした。「罰が当たる」といえば、**借金の取り立てがしやすい**のです。

2つめは、寺社がかこっている**武装集団を使って、暴力的な借金の取り立て**をしたのです。この武装集団は、盗賊対策にも役立てられていました。当時は裕福な寺社を狙った盗賊が多かったからです。

信長が、寺社勢力を目の敵にした理由の2つめは、こういうことでした。中世の寺社は非常に物騒で、欲の深い集団だった、と言えるのです。乱暴に言うと「武装したサラ金業者」という側面もあったのですね。

「財閥」延暦寺＝市や座の支配者

では、どうやって延暦寺は大財閥になったのでしょうか？

3つめに挙げられるのは、**商業や物流も比叡山が支配していた**からです。

武田知弘氏は『**織田信長のマネー革命**』で、次のように指摘しています。

比叡山は・・・商工業全般においても強い影響力を持っていた。と言うのも、当時の商業において「市」というものが重要な位置を占めていたが、この「市」は**実はほとんどが寺社が握っていたのだ。**

当時の「市」というのは、**寺社の縁日に立つことが多かった。「市」に出店するには、寺社の許可があるし、当然地子銭（地代）が発生する。「市」を支配していた寺社たちは、やがて商品流通そのものを支配するようになる。朝廷や幕府に働きかけて独占販売権を入手したり、座を作って他業者を締め出したりするようになったのだ。**

当時、絹、酒、麴、油など重要な商品は、寺社によって牛耳られていた。**酒は比叡山が、織物は祇園社が、麴は北野社が、油は南禅寺などが大きなシェアを持っていたと言われている。また、寺社同士でシェア争いをし、それが騒動に発展することもあった。・・・**

また、**比叡山は商業だけでなく、物流も押さえていた。**

京都の重要な交通機関であった「**馬借**」は**延暦寺が支配していたのだ。**馬借というのは、物資を馬で京都に搬入する運送業者のことである。さらに比叡山は各地に関所を設け、高額の通行税を徴収していた。例えば、**琵琶湖上には11カ所もの関所が設けられていた。**

このように、不動産、金融、商業、運輸など当時のあらゆる産業を比叡山が押さえていたのである。

定期市を支配していたのも、多くは寺社勢力だったんですね。三斎市にしても六歳市にしても、それを取り仕切っているのはたいてい寺社でした。寺社の門前で市は開催され、テナント料（出店料、地代）を寺社に納めました。

数多くの「座」も本所は寺社であり、座役として寺社に上納されました。

そして多くの商品が、日本海側から運ばれて琵琶湖を南進し、大津で陸揚げされ京都へと運ばれてい

きましたが、その物流も日吉大社、つまり延暦寺が支配していました。教科書に出てくる**馬借**や**車借**は比叡山延暦寺が支配していたということです。

中世の日本社会においては（以前ホームページ「日本史の部屋」の第9冊『**寺社勢力の中世**』、**伊藤正敏**、**ちくま新書**で詳細はふれました）、寺社勢力は日本を動かすことのできる巨大権力者、巨大財閥だったのですね。

延暦寺＝平安時代から社会の「困り者」

信長が比叡山延暦寺から様々な経済的実権を奪ってきたがために、信長を仏敵として「信長をつぶしにかかってきた」ことを見てきました。

しかし、比叡山延暦寺など寺社勢力に困らされてきたのは、そして寺社勢力を忌み嫌っていたのは信長だけではありませんでした。歴史を振り返ってみましょう。

特に、比叡山延暦寺は、平安時代からすでに、為政者の悩みの種でした。このあたりも以前、第9冊『**寺社勢力の中世**』（**伊藤正敏**、**ちくま新書**）で詳細はふれました。

例えば、平安時代末期の**白河上皇**は、**天下三不如意**として、**鴨川の水**、**サイコロの目**、そして比叡山の僧を挙げていますよね。**「比叡山の僧」のことを何と呼びましたか？**

そう、**山法師**でしたね。では、**興福寺の僧のことを何と呼びましたか？**

そう、**奈良法師**と呼びましたね。

つまり、平安時代末期の院政期の頃から、比叡山はすでに世の中の「困り者」としてみられていたのです。そして、武士の世になっても、その状況は変わりませんでした。

天皇や公家、幕府や将軍家としては、なんとかして比叡山の勢力を排除したいと思っていました。しかし、**なかなかそれができない事情がありました。なぜでしょうか？**

その理由の一つは、**寺社の中に天皇や公家、武家など為政者の子弟が多数含まれていたから**です。

たとえば、**慈円大僧正**は、**摂政関白の藤原忠通の子**です。また、**室町幕府の第6代将軍足利義教**は、元々延暦寺に入れられて僧になっていました。しかも、彼は天台座主にまで上り詰めています。つまり、延暦寺の最高幹部が幕府の将軍になっているのです。



慈円

ところで、慈円ってどんな人か覚えていますか？彼の著書で日本最初の歴史哲学書と言われるものは何でしょうか？

『愚管抄』ですね。父は摂政関白・藤原忠通ですが、同母兄で摂政関白になった人物は誰でしょうか？

九条兼実でしたよ。また、『愚管抄』を著した目的は何でしょうか？

慈円は公武の協調を理想と考えていたようです。後鳥羽上皇の挙兵の動きに対して、西園寺公経とともに反対し、『愚管抄』もそれを諫めるために書かれたと言われます。

もう一つ質問です。慈円が得度させた鎌倉新仏教の開祖といえば、誰でしょうか？

浄土真宗の開祖、親鸞です。慈円は、当時異端視されていた専修念仏の法然の教義を批判する一方で、その弾圧にも否定的で法然や弟子の親鸞を庇護しています。なお、親鸞は治承5年（1181年）9歳の時に慈円について得度を受けています。

あ、そうそう。2020年のNHKの大河ドラマ『麒麟がくる』で春風亭小朝師匠が演じていた覚怒（かくじよ、かくによ）が登場しました。覚怒は、朝倉と結んで敵対していた比叡山延暦寺の最高実力者（天台座主）でした。彼の父は後奈良天皇であり、『麒麟がくる』では、坂東玉三郎演じる正親町（おおぎまち）天皇が兄として登場していました。ただし、実際は正親町天皇の方が異母弟のようですが。

以上のように、これは、政権にとってはやっかいなことですよ。とても高貴な家柄の僧もいますから、幕府や守護などもなかなか寺社には文句が言えないのです。今の日本でも政治家に対して「忬度」する風潮がありますよね。昔なら、なおさらです。

また、高貴な家柄の子どもの場合、実家から大きな支援を受けることも多いわけです。多額の金品を

贈られたりして、それがまた寺社の勢力拡大に結びついていくのですね。

延暦寺＝武装集団?!

信長は比叡山を焼き討ちにしました。石山本願寺をはじめ、一向一揆に対する大弾圧もしています。なぜ、僧侶たちを弾圧したのでしょうか？比叡山の焼き打ちは「抹殺」と言ってもいいような非道な行為です。なぜ、そこまでやる必要があったのでしょうか？

それを考えるにあたり、確認しなければならないことが2つあります。

1つめは、信長の真の目的は何だったのでしょうか？もう一つ、信長の行為は「仏教の弾圧」だったのでしょうか？

信長の真の狙いは、一言で言えば「寺社勢力の武装解除」でした。つまり、「お前達は宗教団体だから、武器を捨てろ」と言ってるのです。武士以外の人間が武器を持つ必要はないということです。武器を捨てろと言う以上、何かあったときには、信長の力で守ってやる、ということなのです。

お寺やお坊さんに対するイメージってどんなものでしょう？ソフトな印象、優しい印象、心が落ち着く感じ、でしょうか？

現在の私たちがお寺やお坊さんに抱くイメージは、「悪い」イメージは少ないのではないのでしょうか？確かに、葬式の時に高い戒名料を取られたりするなどマイナスのイメージもなくはないですが、それ以外でいえば社会の「悪」とか「敵」とかいうイメージは無いですよね？

ところが、中世は自力救済の時代でした。したがって、寺社勢力の時代であったと言っても良いのです。もっと言えば、寺社は「武装勢力」でもありました。



※僧兵の姿というと**武蔵坊弁慶**をイメージするかもしれませんが、弁慶は平安時代末期から鎌倉時代初めに登場します。弁慶の格好よりも、かなり装備はきちんとしていたようです。また、左の絵よりは右の写真（バンダイの「名将MOVIE REALIZATION僧兵ダース・モール」）の姿に近いかもしれません。

日本では、西欧と違って激しい過酷な「宗教戦争」というものはありませんでした。でも、全くなかったわけではありません。

日本で「宗教戦争」と呼べるようなものは、中世の日蓮宗と浄土宗・浄土真宗の争いなどがありました。

日本史の授業でも出てきますよね。

1532年、**日蓮宗の僧侶たちが浄土真宗本山の本願寺を焼き討ちした事件**がありました。当時、本願寺は京都の山科にありました。日蓮宗に焼かれてしまったので、本願寺は大坂の石山に移ります。ですから、**石山本願寺**といえますね。

そして規模の上でさらに大きかったのが、「**天文法華の乱**」（1536）です。**比叡山延暦寺の僧兵たちが京都市中の日蓮宗の寺院に焼き討ちを掛けた**のです。「天文法華の乱」というネーミングから判断すると、日蓮宗側が攻撃を仕掛けたのかと思いますが、逆です。

では、**なぜ、比叡山はこんなことをしたのでしょうか？**

それは、**京都の町衆の中に日蓮宗の信者が増えていったから**です。比叡山は自分たちの市場・儲けられる場所を取られたからです。そこで、市場を取り戻すために「あんな邪教を広めるのはもってのほかだ」といって僧兵を差し向け、日蓮宗寺院を焼き討ちしたのです。女性や子供も含めて皆殺しにしたといえます。

えっ、僧兵が「女子供まで皆殺しにした」のですか？「慈悲」を説くお寺やお坊さんが女子供を皆殺しにしたのですか！？

つまり、**この時代、宗教団体同士の争いは、お互いが武器を持っているため、すぐに殺し合いにエスカレート**する傾向があったのです。今のような平和な時代だったら話し合いですむことが、戦争になってしまうのです。

さらに、彼らの武力が経済力に裏打ちされ、非常に強大なものであったことも、争いを必要以上に大きくしたのです。どういうことかということ、お互いが武器を持っていると、なかなか武器を捨てることはできません。相手が武器を持っているのに、こちらだけ武器を捨てるわけにはいきませんからね。

でも、**どうして寺社や僧侶は武装していたのでしょうか？**ヒントは「中世は自力救済の時代」である、ということでしたよ。

特に、応仁の乱の前後から、いわゆる「戦国時代」に突入します。戦国時代と言えば「乱世」です。つまり、「治安が維持されていない時代」ということです。強大な中央権力が存在しないわけですから、警察が有名無実化したり、警察がないようなところもありました。となれば、**強盗などから自分の身を守るためには武器を持たなければなりません。**

つまり、**戦国時代というのは、みんなが武器を持っていた時代だ**、と言えるのです。

武器を持っているのは武士だけではなく、農民や職人を除くすべての階層の人々が武器を持っていたのです。例えば、「僧侶と神官」も持っていました。つまり、**宗教勢力も武器を持っていたのです**。

彼らにも生命と財産を守る権利は当然あります。大きな寺や神社であれば、お賽銭など以外にも多くのお金が集まります。また、寺社は様々な利権、つまり荘園や関所や座からあがってくる上納金なども持っていたので、自らを守る必要がありました。財産が多いと、それを狙う夜盗強盗の類が寺社を狙うようになりますからね。

江戸時代のように治安がよい時代なら幕府やお奉行様に守ってもらえばよいですが、当時の室町幕府にそんな力はありませんでした。ですから、寺社も自ら武装したのです。

そして、武装しているということは、それらの勢力が圧力団体になっていくということです。為政者の言うことを聞かない団体が、武装もしているのですから、為政者からすれば、大変です。これが戦国時代の実相なんです。

このような時代に、信長は、寺社が武器を持って政治に関与することはいけない、と主張し続けました。そして、武器を持たず政治に関与しないのであればすべて許す、という態度をとり続けました。

本願寺と信長の対立にしても、最初に攻撃を仕掛けたのは本願寺の方だったといえます。

信長が本願寺に勝ったとき（正親町天皇の仲介で和睦をした）、信長は本願寺に対してどのような「仕置き」をしたのでしょうか？

信長は「**総赦免**」にしました。「これまでの罪はすべて許す」ということです。1570年から1580年までの10年間にわたり、石山本願寺とは戦い続けました。かなりの時間や労力を費やさざるを得ませんでした。多くの武将や兵を失いました。それでも「**すべて許した**」のです。

しかも、「往来は自由」、つまり「信仰は続けて良い」とも言っているのです。ただし、石山を明け渡すという条件を出しましたが（跡地に大坂城を造ることになります）。

なぜ、比叡山の焼き打ちをした「悪逆非道」の信長は、本願寺に対して寛大だったのでしょうか？

それは、石山本願寺が武器を捨てたからでした。武装解除に応じたからです。

つまり、信長の考えは、いわゆる「**政教分離**」政策です。現在の民主主義国家と呼ばれる国は「政教分離」政策を取っています。イスラム諸国では「政教一致」のところがありますが。そして、この政教分離政策は豊臣秀吉を経て、徳川家康によって完成されていきました。

一方、比叡山延暦寺に対しては「焼き打ち」をして「皆殺し」にしました。なぜでしょうか？

それは、**比叡山延暦寺が信長の求める武装解除に応じなかったから**です。信長の実施した経済的政策で多くの利権を失った比叡山延暦寺は信長を「仏敵」と考え、信長の求めに応じないばかりか、信長つづしに狂奔したからです。

お寺やお坊さんというのは「丸腰」の平和な人たちだと思っていますが、それは「先入観」と言っても良いのです。そして、そんな武器を持たない人たちを焼き殺したから信長は残酷だと思ってしまうのですが、実際は違うのです。

当時の寺社=宗教勢力は、お互いが殺し合いを繰り返しているとなんでもない武装集団だったと言っても過言ではないのです。天皇・上皇や公家たちに対して神輿や神木などを持ってきて強訴し、自分たちの要求を通そうとする無頼漢だったのです。そして、**信長が行ったのは、その武装集団の武装解除だった**のです。

そして、のちに豊臣秀吉が完全な「武装解除」を成し遂げていきました。それが「刀狩り」ですよね。なんとなく、百姓から刀を取り上げたイメージがありますが、武士以外のすべての人から武器を取り上げたのです。当然ですが寺社勢力からも武器を取り上げました。

ちなみに、武士から武器を取り上げるようになったのが、明治の「廃刀令」でした。



4回にわたって織田信長の経済改革について見てきました。

織田信長は、単に軍事的に強かっただけでなく、経済的な豊かさが軍事力の強さに結びついていました。しかも、強い経済力の要因は、広い土地や豊富な年貢にあるというよりも、**津島や熱田などの湊を支配**することによって富を獲得してきた祖父や父のやり方を踏襲していたことにあります。

また、信長が登場した頃の日本では、中国からの輸入がストップしたこともあり、日常使用している銅銭が足りなくなってきました。その結果、デフレーションという状態に陥ってしまったのです。そこで、信長は高級な品物の売買に関しては、金や銀を使用するように誘導していきました。米を銭として使用することもやめました。**銅銭から金貨や銀貨（貨幣というにはまだ早いですが）に大転換**する金融大改革を行いました。

さらに、**関所の廃止、道路の拡幅、枅の統一、楽市楽座**などの政策を実施しました。これらによって、人や物の流れがスムーズになり、商品が関所を通るたびに関銭を取られることもなくなりました。同業

者の特権的な組合である座に入っていない者でも、安土などでは自由に商売ができるようになりました。

その結果、「**価格革命**」が起き、消費者に多大な恩恵をもたらしました。いや消費者だけではないですよ。生産者や販売者にとっても、これは恩恵です。

一般に、信長は「悪逆非道」な人物として描かれることが多いです。確かに比叡山延暦寺の僧侶などを殺しました。しかし、先ほども述べたとおり、それには合理的な理由がありました。信長が行ってきた様々な改革により経済的損失を受けた寺社が信長を「仏敵」として敵視したわけですから、信長に協力しないばかりか、潰そうとしたわけですから、信長としても放って置くわけにはいきませんでした。

信長に好印象をもつ私としては、「信長は悪逆非道な奴だ」という評価に関して、少し反論したいのです。

あなたは「**防御御札 (ぼうぎょおんさつ)**」って知っていますか？どんなものかは実物がないので、イメージを持ってもらうために、別のものを用意しました。なお、この防御御札のことは、[大村大次郎氏の『会計の日本史』\(清談社\)](#)にも詳しく書かれてあります。

下の写真は京都の西北にある**愛宕神社の「火煙要慎」の御札**です。京都に住んでいる人は、台所などにこの御札が貼られているのを見たことがあるかもしれません。「火事になりませんように」という願いがこの御札には込められています。



写真は京都愛宕神社の「火煙要慎」の御札

信長の場合の「防御御札」は、これとは趣旨が違います。これは合戦をする前に、その戦場となりそうな村や町に対して信長軍団への「協力金」を出させて、協力金を出した村や町に入っていった場合、その村や町から物を奪ったり、家屋を燃やしたり、村人や町人の命を奪うなどをしない、ということを保証するものでした。

協力金を払った際に、確かに支払いをしたという証明のために信長が発行したのが「防御御札」と言

われるものです。この「防御御札」を、村や町の入り口あたりに掲示しておけば、信長軍団は無体なことをしないようにしたのです。つまり、戦争協力金を払った「防御御札」のある場所では、信長軍団は陣を構えたり、狼藉をしてはならないことにしたのです。

そもそも信長の目的は「天下布武」ですよ。信長が戦っているのは私利私欲のためではなく、「治安回復」が目的です。信長軍団に属する者が、乱暴狼藉を働くことは絶対に許せないということを示すものが「防御御札」なんです。

協力金を払わなければ、強盗に遭ったり、家を燃やされたり、命を奪われたりします。でも、協力金さえ出せば、助かるのです。中世の特徴を一言で言えば「自力救済」ですから、金を出すという「自力」によって助けて貰えるわけです。

これって、無茶苦茶、ありがたいですよ。確かにお金は取られます。でも、命などは助かるのです。信長が、防御御札を発行した人たちには、あくどいことはしないのです。しないことを保証したのです。

他の大名たちも、協力金をもらったら手出しはしないという約束をしました。ただ、信長と違うのは各の現場の隊長が発行していたそうです。いくつかの部隊が紛れ込んできたら、それぞれの部隊長に協力金を支払わなければなりません。二重にも三重にも取られてしまうこともあり得ます。でも、信長軍団の場合は、窓口は1つなんですよ。合理的で効率的で、民衆の側からすれば、安心できる政策です。

これって民衆の側からいえば、この防御御札の制度は、ありがたいものだったと言えるのではないのでしょうか。

私は、防御御札の制度を見ても、信長が権力掌握をめざしつつも、民衆のためにもなることをたくさん実施してきたことは間違いないと思うのです。それは信長の「優しさ」というよりは「狡猾（こうかつ）さ」といった方が正しいのかもしれませんが、大事なものは結果だと思います。

豊臣秀吉、徳川家康と繋いで戦争のない「平和な時代」になっていきますが、信長が先鞭をつけたのは間違いないでしょう。

今回の『織田信長のマネー革命』は4回にわたりました。いつもなら、「上」「中」「下」の3回でまとめるのですが、ついつい説明が長くなってしまいました。

今回もお読みいただき、ありがとうございます。

